

# 北海道演習林における鳥類相の季節変化について

二 村 一 男

## はじめに

前報<sup>1)</sup>において、北海道演習林標茶区とその周辺の鳥類相の調査結果を鳥類目録として報告した。今回はそれに引き続き、鳥類相の内容である季節変化に関して報告する。

標茶区の冬は、内陸性気候のために北海道東部でも寒さの厳しい場所である。極低気温は $-30^{\circ}\text{C}$ に達することがあり、年平均気温は $5.5^{\circ}\text{C}$ で、ちなみに隣接地の釧路湿原においても $5.5^{\circ}\text{C}$ で、これとほぼ同緯度の札幌は $7.8^{\circ}\text{C}$ 、帯広は $5.9^{\circ}\text{C}$ である。この低温のため冬季には約50cm程度の季節凍土が形成され、カラマツ、エゾマツ、トドマツなどの造林木の霜害や寒風害、樹幹の凍裂害といった林木の気象害が発生する。

冬季の気象条件が厳しい場所にもかかわらず、標茶区周辺を含めた地域の年間の鳥類相は111種<sup>1)</sup>にも達し、多数の鳥類が飛来することが明らかになった。これは夏の生息環境などによるものと思われる。そこで本報告では、その点に注目して検討を加えたものである。

標茶区の周辺域は標茶町の基幹産業である酪農の牧草地と、一部はカラマツとトドマツの人工林などにとり囲まれている。また区内の森林面積1443haのおよそ75%は落葉広葉樹の天然生林となっているため鳥たちにとっての格好の生息、休息地および渡り鳥の渡来コース、繁殖地として寄与しているものと思われる。そこで特に樹木の芽ぶき時期などを含めた自然観察記録と対比して鳥類が、この標茶区の森林に対し四季を通じてどのような生活を営んでいるかについて報告する。

なお、哺乳類としてはエゾシカ、キタキツネ、エゾタヌキ、ニホンイイズナ、ホンドイタチ、エゾリス、エゾシマリス、エゾモモンガ、エゾヤチネズミ、ミカドネズミ、エゾアカネズミ、エゾヒメネズミ、エゾユキウサギ、エゾトガリネズミ、オオアシトガリネズミ、コウモリ類などが生息し、時にはヒグマも現れることがある。また釧路川河畔には野生化したミンクも生息している。

報告に際して、林内の芽ぶき時期などの観察記録を提供していただいた北海道演習林の石原寛一氏、とりまとめに協力いただいた京都大学演習林の大畠誠一氏に厚くお礼申し上げます。

## 調査地および調査方法

京都大学北海道演習林標茶区は、1987年7月31日に第28番目の国立公園に指定された釧路湿原国立公園の東北部にあたり、面積は1443haで地形はゆるやかで起伏の少ない丘陵からなり海拔高は50m~140mで、一部を除いてほとんど牧草地に囲まれている。大畠<sup>2)</sup>らの調査した地形区分によると起伏の少ない尾根状の面積が約50%強を占め、釧路川の支流の多和川にそった谷筋の湿地が10%以下で残りの40数%が斜面である。天然林は、ミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ、ヒロハノキハダ、センノキ、ケヤマハンノキ、エゾノシラカンパなどを主とする落葉広葉樹林からなり、ハシドイ、ツリバナ、マユミ、ヤマグワ、ヤナギ類などの低木類が多い。灌木類は、ヒョウタン

ボク類、エゾニワトコ、エゾヤマハギなどで、林床にはオニミヤコザサが優先し、一部にはホザキシモツケの群落も見られる。このように鳥類の生息環境の背景となる林相は、北方系森林特有の比較的単純な森林である。皆伐地の造林不適地の沢筋にはヤマブドウやサルナシが繁茂している。草木ではハンゴンソウ、ヨブスマソウなどの大型草本の生い茂る林床も認められ、低湿地には、オオブキ、エゾイラクサなどが優先し、所々にハルニレ、ミズナラ、ヤチダモ等の大径木が残され、特殊な鳥類の営巣場所を提供している。以上の天然林のほか、全森林面積のおよそ25%はカラマツ、トドマツの人工林が造成され、小面積ではあるがバンクスマツ、ストロブマツ、ドイツウヒなどの外国産針葉樹類の人工林も造成されている。この人工林は、植栽直後のものから30年生のものまで様々な林令の林がある。周囲の牧草地を含めて鳥類の生息環境としては実に多様な環境を提供していると判断される。人工林を含めた標茶区の森林はここを利用する約50%におよぶ夏鳥の繁殖地としてバランスのとれた林相といえる。また、このような林相が夏鳥と留鳥の営巣場所や、育雛期の採餌行動に適した場所であり、通過する旅鳥や冬鳥の休息地などとして重要な役割をはたしているものと思われる。また、近くの多和川、釧路川はガンカモ類の休息、繁殖の場所を提供しているものようである。

調査方法は、四季を通じ9倍の双眼鏡を使用して生態観察を行った。種別の確認と、とりわけ見のがしがちな採餌行動について、どのような実や新芽などを食べるかをできる限り注意して観察した。著者が1981年から1984年までの3カ年に行った鳥類と生物の観察調査に加え、樹木の芽ぶきの生物季節の観察は石原寛一氏に依頼し、1987年5月上旬から6月上旬にかけて観察した記録を資料とした。

## 調 査 結 果

個々の鳥類の季節的観察結果は図1に示した。また表1は気象の変化とそれに関連する樹木の芽ぶきや野草の開花と鳥類の渡来、渡去ならびに繁殖を表わしたものである。これらの結果をまず四季に分けて記載した。

### I. 春の鳥（3月，4月，5月）

北海道の春のおとずれは遅い。3月でも山は冬景色であり、外気も氷点下の日が多く道東特有のブリザードや春の湿ったドカ雪が降るのもこの頃である。3月中旬から4月にかけての季節は、北方へ渡去する冬鳥と渡来した夏鳥の一部が観察される時期である。

この季節にオオハクチョウの家族群やヒシクイの小群が釧路川や多和川の上空を通過する。また、イスカやベニヒワがカラマツの実を採餌したり、雪のとけた地面で餌さがしをする。3月下旬、夏鳥の初渡来は、ハクセキレイで人家の屋根や電線などでさえざったりディスプレイをしている。4月に入ると本州ではごく普通の留鳥であるが、ここでは夏鳥のキジバト、モズがやってくる。

4月のなかば頃、日当たりのよい凍土層の表面が溶けだした所では春一番のフクジュソウやヒメイチゲが咲きだし、フキノトウが出てくる（表1）。小川のほとりのネコヤナギも春の陽ざしに輝き、牧草地ではヒバリのさえずりを聞くことができる。一般に生物ごよみでは春のおとずれとしてウグイスの初鳴き日がよく知られているが、著者がこれまで調べたウグイスの平均初鳴き日は、標茶では4月25日、和歌山県の京大演習林では2月26日、京都府の芦生演習林では3月23日、京都市内の上賀茂試験地では3月29日、京都大学北部キャンパスでは3月28日、山口県の京大徳山試験地では2月12日であった。このように初鳴きは近畿の京都市街地と標茶を比較すると標茶で1カ月近く遅いことになる。標茶のウグイスの初鳴きの頃に根雪も消える。

	気象の変化	植物の生態	野鳥の生息変化
3月	流水, プリザード		オオハクチョウ, ヒシクイ, イスカ ハクセキレイ
4月	根雪が消える 凍土の融解はじまる	フクジュソウ, ヒメイチゲの花 フキノトウ, ニワトコの芽ぶき	ベニヒワ, ヒバリS ウグイスの初鳴き, アオジS, オオジシギのフライトディスプレイ
5月	春の異常乾燥期	カラマツ, ヤナギ, ハシドイの芽ぶき エゾヤマザクラの花 ミズナラ, ヤチダモの芽ぶき, セイヨウタンポポの花	ヤマシギ, カワセミ, イソシギ, センダイムシクイS, オオハクチョウの渡去 ヤマシギ抱卵 カッコウS, キビタキS, コノハズクS, ハリオアマツバメ エゾセンニュウS, アオバト, ムクドリの育雛
6月	エゾハルゼミ鳴く	スズラン, クロユリの花	キビタキの育雛 クマガラの巣立ち
7月	コエゾゼミ鳴く	ハシドイ, ホザキシモツケの花	コムクドリの育雛, オオタカの巣立ち ピンズイの育雛, シマアオジの育雛, ノビタキの育雛, ハイタカの巣立ち カワセミの育雛
8月		エゾリンドウ, エゾヤマハギの花	
9月		オニグルミの黄葉	アオジの幼鳥 キアシシギなどの渡り, キジバト, ハクセキレイの渡去 アオバト, ハリオアマツバメの渡去, カラ類の混群
10月	初氷 雄阿寒岳など初冠雪 冬日	ミズナラ, イタヤカエデの黄葉, ヤチダモの落葉	オオハクチョウの渡来 ツグミ, ヒシクイの渡来 タンチョウ
11月	初雪, 土壤凍結	カラマツの黄葉	イスカ, ベニヒワの渡来
12月	塘路湖などが全面結氷 真冬日		キンクロハジロ, ホオジロガモ カワアイサ, ヤマセミ
1月	ダイヤモンドダスト		
2月	凍土層40~50cm	樹木の凍裂現象	

※ Sはさえずり

表-1 気象の変化及び植物, 野鳥の季節変化



科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
キツツキ	アリスイ				—									● ● ● ● ●
	ヤマゲラ				—									
	クマガラ		○		—									
	アカゲラ				—									
	オオアカゲラ				—									
	コアカゲラ				—									
ヒバリ	ヒバリ													● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
ツバメ	ショウドウツバメ													
	ツバメ													
セキレイ	キセキレイ							○		○				
	ハクセキレイ													
	セグロセキレイ													
	ピンズイ													
ヒヨドリ	ヒヨドリ				○	○								
モズ	モズ				—									
レンジャク	キレンジャク		○											
ミソサザイ	ミソサザイ													
ヒタキ	ノゴマ													
	コルリ													
	ノビタキ													
	トラツグミ										○			

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ヒタキ	アカハラ				—							○		● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
	ツグミ				—									
	ウグイス				—									
	エゾセンニュウ				—									
	シマセンニュウ						○	○						
	マキノセンニュウ													
	コヨシキリ													
	エゾムシクイ													
	キクイタダキ													
	キビタキ													
	オオルリ							○						
サメビタキ							○							
コサメビタキ							○							
エナガ	エナガ													
シジュウカラ	ハシブトガラ													
	ヒガラ													
	ヤマガラ					○	○							
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													
キバシリ	キバシリ													
ホオジロ	ホオジロ			○	○									
	ホオアカ						○	○						

図-1-2



ビタキやコルリのさえずる広葉樹林には声のブッポウソウのコノハズクが渡来し、主に夜間鳴声を聞くことができる。5月下旬になって高木のミズナラ、ダケカンバ、センノキ、オニグルミ、キハダ、ヤチダモなどが遅い芽ぶきを開始し新緑となり森は春から初夏へと移って行く。

## II. 夏の鳥（6月，7月，8月）

6月になると夏鳥では遅いアオバトやトッピンの名で親しまれているエゾセンニュウが夜間によく鳴くようになる。この時期、夏鳥や留鳥の繁殖期になるが、この地方では本州以南のような梅雨前線は形成されないものの天候が不順であり鳥類の繁殖を確認することは困難なことが多い。これまでの調査のなかで営巣を確認した種の営巣場所をのべてみると、ミズナラの暴れ木には、クマタカやトビが営巣し、成林した20年生くらいのカラマツ林には、オオタカ、ハイタカ、ミヤマカケス、ハシブトガラス、ハシボソガラスが営巣し、その林の地上には、エゾライチョウやヤマシギが営巣し、ヤチダモ、ケヤマハンノキ、ハルニレなどの大径木の立枯木には、クマゲラ、オオアカゲラ、アカゲラが、ミズナラの樹洞には、ムクドリ、コムクドリ、ニューナイスズメ、ハリオアマツバメなどがそれぞれ営巣場所として利用している。

下層木のホザキシモツケなどの群落にはモズやアオジ、ベニマシコが、開けた林道ぶちにはビンズイが、河川の堤にはイソシギ、ノビタキが、橋桁にはハクセキレイが、植栽して数年たった造林地にはオオジシギが、それぞれ営巣する。ちなみにオオジシギは、酪農家の話によると牧草地に営巣する頃が牧草の一番刈りのシーズンとなり、しばしば抱卵中の卵が被害になるそうである。

6月も中旬になると、エゾハルゼミが鳴きスズラン、クロユリが咲き、7月上旬から中旬にかけてハシドイ、ホザキシモツケそれにエゾスカシユリ、カラマツソウ、ヤマハマナス、ヒオウギアヤメ、エゾカンゾウ、センダイハギなどの北の花が一斉に咲き出し、七月下旬にはコエゾゼミが鳴き出すと夏のまっ盛りとなり道東の海岸線に多い原生花園も花ざかりとなる。この時期には、夏鳥はさえずりをやめ、時折巣立ちした若鳥を観察することがある。一般に鳥類の繁殖を確認することは困難なことが多いが、これまでの観察で36種を確認した。なかでも根室、釧路地方で繁殖記録のなかったコチドリ<sup>5)</sup>の繁殖が隣接地の釧路川の砂礫地で確認できたことと、クマゲラ<sup>6)</sup>も標茶区で初めて繁殖が確認できた。

8月になると北国の不順な天気も安定し、夏空にはもう秋の雲が出はじめ、エゾリンドウやエゾヤマハギの花が夏の終りを告げる。これまで6月、7月に林道ぞいで行った鳥類の個体数調査から尾根部分の広葉樹林では、センダイムシクイが最も多く、ついで多い順からキビタキ、アオジ、イカルなどで、平地ではエゾムシクイが最も多く、ついでアオジ、イカル、ハシブトガラなどであった。標茶区での夏鳥の個体数の概況は広葉樹林性のセンダイムシクイ、キビタキの優占度が高く、全般的な共通種として隣接地の根室地方にも多い<sup>8)</sup>アオジの生息数が多い。

## III. 秋から冬の鳥（9月，10月，11月，12月，1月，2月）

9月のなかば過ぎ、オニグルミの黄葉がはじまるとキアシシギが多和の上空を鳴きながら渡って行く。シギやチドリ<sup>7)</sup>の渡りのシーズンである。釧路川の中洲には少数のハマシギやツルシギ、タカブシギ、キアシシギなどが休息に立寄る。また、その年に繁殖したノビタキの幼鳥と成鳥の20数羽の小群を観察したことがある。

夏鳥の渡来はそのさえずりで容易に知ることが可能だが、渡去の時期はまちまちで、確認が困難なことが多い。観察によってほぼ時期が確認できた種は、キジバト、ハクセキレイの渡去は9月中旬、アオバト、ハリオアマツバメ、ビンズイは9月下旬頃であった。また、留鳥のシジュウ

カラ、エナガ、ハシトガラの混群が観察できるのも9月下旬である。10月のはじめ釧路川の上を飛ぶオオハクチョウの家族群が観察でき、初水がはるとミズナラ、イタヤカエダの黄葉が始まり、ヤチダモが落葉しだす。ヤチダモは芽ぶきが遅く落葉期までわずか4カ月の着葉期間である。10月のなかば静かだった広葉樹林に冬鳥のツグミが10羽から50羽の小群で飛来する。このツグミの渡りは、1週間から10日間がピークで林内で休息しては移動して行くようである。そしてこの頃、雄阿寒岳、雌阿寒岳、斜里岳、武佐岳などの山々が初冠雪となる。近くのシラルトロ湖には、本州に南下する途中のヒシクイの300羽前後の群れが休息のため飛来し、湖に自生するヒシの実をさかんに採餌している。10月下旬には、日最低気温が0℃未満のいわゆる冬日が続くようになり春から夏のあいだ湿原で過ごしたタンチョウが時折、多和付近のデントコーンの刈跡や牧草地に採餌にやってくることもある。

11月中旬には初雪が降り、下旬にもなると土壤凍結が始まり、本格的な冬の到来となる。すっかり落葉し、明るくなった林や林道ぶちにエゾライチョウが目立つようになり留鳥のシジュウカラ、エナガ、ハシトガラなどが少数の混群で林内を漂行し、時折ヒガラ、キクイタダキもこの群れにまじることもある。不定期な冬鳥であるイスカやベニヒワが11月下旬から12月のはじめにかけて10羽から100羽くらいの群れでカラマツ林や構内のドイツトウヒ、ヨーロッパアカマツなどの実を求めて渡来する。

12月のなかばすぎ凍土層は18cmくらいに達し、小川や湿地、近くのシラルトロ湖、塘路湖が全面結氷となり、オオハクチョウ、マガモ、カワアイサなどの少数の越冬個体が観察できる。12月下旬にかけて寒さがきびしくなり、日最高気温でも0℃以上にならない、いわゆる真冬日が続き、晴天の日も多く、夜間の放射冷却現象によってマイナス25℃近くになることもしばしばである。このように冷え込んだ無風のよく晴れた朝には空気中の水分が凍りついて結晶がキラキラ輝いて降りそそぐダイヤモンド・ダストが見られる。このような朝は、さすがに野鳥の活動もややにぶいように思われる。釧路川や多和川では、水蒸気が立ちのぼり岸辺の草や灌木が霧氷におおわれることもある。ここにはオオハクチョウやキンクロハジロ、ホオジロガモ、カワアイサ、ヤマセミがやってくる。標茶の積雪はせいぜい50cmくらいで、地表の雑草をすべて埋めつくすことは少ない。したがって雪の上に出ているアカザやナギナタコウジュの実を食べているベニヒワやアトリを観察することがある。4月から12月にかけて構内の事務所付近や宿舎周辺にはスズメが生息し、宿舎の換気口に営巣するが、12月下旬から3月頃までの冬期間は、どこかに移動するようであった。多和地区周辺を調べたところ近くの酪農家の牛舎に100羽前後が集っていた。ここは牧草を貯蔵する建物がねぐらとなり牧草の実や飼料のおこぼれが格好の餌になっているようであった。

かつて標茶区の構内には木造の大きな製材所があり、ここが数百羽にもおよぶ冬鳥のハギマシコのねぐらになっていたこともある。最近では小さな休憩所のヒサシにスズメが2羽とハギマシコが1羽ねぐらとして利用している。このような寒さのきびしいこの地域では野鳥たちにとって冬期のねぐらは重要な生活の条件である。

最近、冬になると市街の住宅地のわずかな空間を利用してエサ台や小さな水場を作ったり、野鳥が好む実のなる木を植え、野鳥を身近に呼ぶミニサンクチュアリが話題をよんでいる。著者も標茶区の構内で以前から設置されていたものを引き継いで観察した。近くに観察用のブラインドを張りエサ台にやってくる鳥たちを観察した日もあった。エサ台は数本のトドマツの下に高さ1m50cmくらいで、ブタの脂身を置き、貧欲なハシトガラスが持ち去るのを防ぐための金網がかぶせてある。比較的よくやってくるのは、ミヤマカケスとアカゲラ、ヤマゲラで、小型のヒガラなどは5～6羽でトドマツの樹冠で、その順番待ちをしている。やはり優先順位があり、その



順番は個体の大きさによるようであった。まず、大型種のミヤマカケスやヤマゲラなどが去ると、ゴジュウカラ、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヒガラの順となり、コゲラも採餌にやってきたこともあった。

標茶区に生息している鳥類で唯一の天然記念物であるクマゲラは、きわめて少なく2羽から4羽くらいと思われる。これまでミズナラ、ハルニレの採餌木で採集した5月の排せつ物の内容を調べたところほとんどムネアカオオアリ<sup>7)</sup>であった。このムネアカオオアリの巣食う木は半枯れのミズナラの暴れ木やハルニレ、キハダ、ケヤマハンノキなどの大径木の立枯木であり、この立枯木は営巣やねぐらとしても利用する。

## 考 察

標茶区における鳥類の季節変化を図1にまとめて表わした。種の区分は隣接地の根室管内で長年観察された三浦<sup>8)</sup>らの記録を参考にした。すなわち留鳥は年間を通じて見られるもの、夏鳥は繁殖のために渡来するもの、冬鳥は越冬のためにやってくるもの、旅鳥は春秋の渡りの時に立寄るものと、そのほかおもに夏鳥だが季節外れに観察したものは旅鳥とした。図2のA図から全種の年間の推移についてみると、3月から5月にかけて夏鳥の渡来によって5月には種類が最大となり、冬期の約2倍の種類となる。6月からは繁殖期に入りほとんどの鳥類はさえずり行動が少なくなり鳴声による確認種数が減少すると思われる。7月から8月まで下降が続き、9月には大部分の夏鳥が渡去する。3月から10月までの7カ月間は、繁殖のために渡来

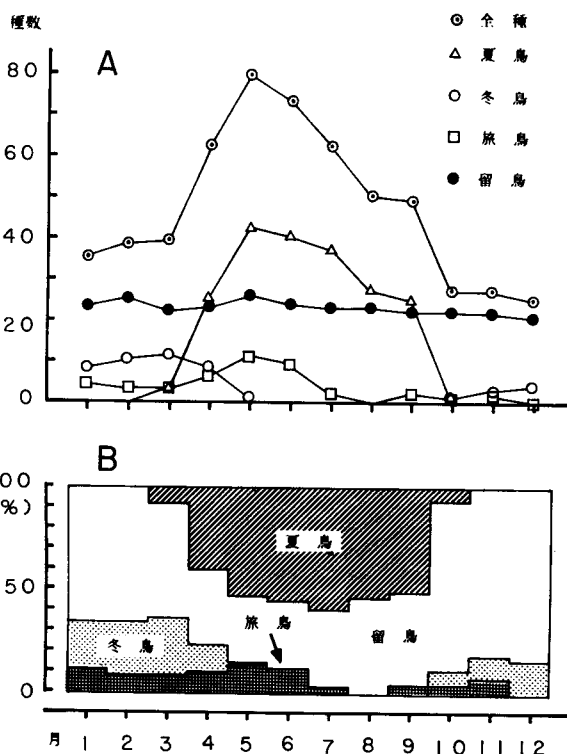


図-2 鳥類相の習性による季節変化

する夏鳥が大勢を占め、そのピークは5月から7月である。(図2 A図) 留鳥は、キツツキ科、シジュウカラ科、エナガ科、ゴジュウカラ科、ライチョウ科、カラス科など約20種が通年ほとんど変化なく生息し、冬鳥は10月の渡来時と1月から5月の渡去時に観察される。図2、B図は、図2、A図をパーセント表示で示したものである。この図によって鳥類の構成状態の季節的変動がよく理解できる。冬期の標茶区周辺に生息する鳥類の65%~80%が留鳥からなる。この季節に渡去する冬鳥がおりその種は2、3月に多く、20~25%程度である。このグループにはガンカモ類が多い。旅鳥は、8月~9月、12月には目撃されなかったがほぼ通年10%程度の構成種となる。3月から9月の6カ月間は夏鳥の季節である。その種数は7月に60%を占めた。この比率は種数であるが、鳥類の個体数で示した場合には、80%を越えるであろう。

冬鳥は、木の実や草の実を採餌することが多く、なかでもカラマツの実が留鳥のシジュウカラや冬鳥のベニヒワやイスカの餌としてよく利用される。このことは標茶区のカラマツ林が成木林

となり結実する林が増大すると定期的に渡来する冬鳥の重要な中継地としての役割は大きいと思われる。以上のように日本の北端の島、北海道で、しかも冬季に雪が少ない道東で鳥類をを大まかにみると主に夏鳥と、20～25種程度の留鳥とからなる。この特徴は、鳥類相を四方向の図形でまとめ、本州での図で比較すると、さらに明らかとなる。(図3) 本州に比べると標茶区の鳥類相は冬鳥、旅鳥および留鳥とも少なく、圧倒的に夏鳥が多く、冬季の厳しい生息条件と対応している。ちなみに北海道内の旭川周辺<sup>9)</sup>と千歳・恵庭地方<sup>10)</sup>で調査した年間の鳥類相を比較すると表3のようになる。夏鳥は三地区とも50%前後とほぼ同じであるが、道央の旭川では冬鳥が多く通年生息する留鳥の種類は少ない。

一般に鳥類の食性を調べる方法として捕獲によって嗦囊・砂囊の中味を調べる方法や不消化物のペリットや糞などの内容を調べる方法があるが手軽な方法として観察によって採餌中の木の实などの種類を調べることがある。標茶区とその周辺で観察した24種類の鳥類の食性の一例を表2に示した。これによると餌になる動物質の虫などがほとんどいない春先には雑食性のコサメビ

種 名	食 性
オオハクチョウ	牧草
ハイタカ	アカハラ人の野鳥(育雛中)
エゾライチョウ	ベニバナクローバ, ミミナグサの実, シラカンバの芽
フクロウ	エゾヤチネズミ, エゾトガリネズミ, オオアシトガリネズミ, キツツキ類(ペリットの内容物)
カワセミ	ヤマメ(育雛中)
クマゲラ	ムネアカオオアリ, カミキリムシの幼虫
ビンズイ	クモの類(育雛中)
モズ	昆虫, ハナバチの類(はやにえ)
アカハラ	ツルウメモドキの実
キレンジャク	ナナカマドの実
ツグミ	ナナカマドの実
コサメビタキ	シラカンバの花穂
ハシブトガラ	チョウセンゴミシ, バンクスマツ, カラマツなどの実, ヤナギの花穂
ヒガラ	ヤナギの花穂
シジュウカラ	カラマツの実
アトリ	アカザ, ヨモギ, イボタなどの実
カララヒワ	カラマツの新芽, ヨモギの実
マヒワ	ケヤマハンノキの実
ベニヒワ	カラマツ, ドイツトウヒ, ケヤマハンノキ, アカザ, ナギナタコウジュなどの実
イスカ	カラマツ, ドイツトウヒ, ヨーロッパアカマツなどの実
ベニマシコ	ヤナギの花穂
ニューナイスズメ	カラマツの実と花芽
スズメ	カラマツの実
ハシブトガラス	アジサシを捕食したところを観察

表-2 鳥類の食性観察記録

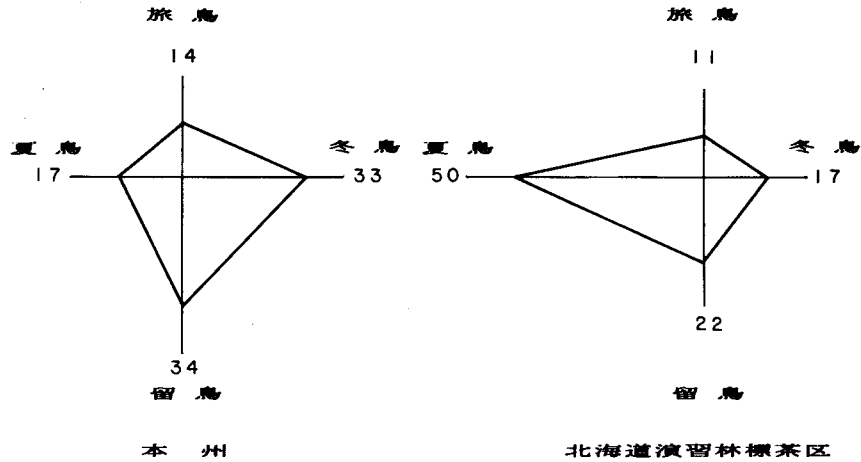


図-3 本州と標茶区における渡り鳥の割合の比較

(本州の資料は「野鳥の調査バードカウント入門」松田道生1985より引用) 数字は%

タキ, ハシブトガラ, ヒガラ, カワラヒワ, ベニマシコ, ニュウナイズズメなどがシラカンバ, ヤナギ類, カラマツなどの新芽や花穂を食べることがある。このことは春の遅いこの地方における餌不足のためか、一時的な好みのためか興味深い採餌行動と思われる。標茶区で観察した鳥類の生息と食性との関係を図4に示した。種類ごとの食性は清棲<sup>11)</sup>により分類した。一般に鳥類は年間を通じて繁殖期とそれ以外では多少の食性が異なるが通常おもに採餌する餌をその種の食性とした。分類は動物食性, 植物食性, 雑食性にそれぞれ分けた。動物食の鳥類は4月から8月にかけて繁殖のために渡来する夏鳥が多く, 約40種となり, 冬期には10種前後に低下する。植物食の鳥類は主に冬鳥で1月から3月にかけてやや多いものの四季を通じ10種類前後の鳥類が生息している。雑食性の鳥類は留鳥や一部の夏鳥で繁殖期に多くなり年間を通じ20~30種が生息していることになる。図4, B図にはそれらの構成状態をパーセント表示にした。この図に認められるよう

地区 生息状況	標茶区	旭川周辺	千歳・恵庭地方
	%	%	%
夏鳥	50	48	49
留鳥	22	19	28
冬鳥	17	28	13
旅鳥	11	5	10

表-3 標茶区と北海道内における鳥相の比較

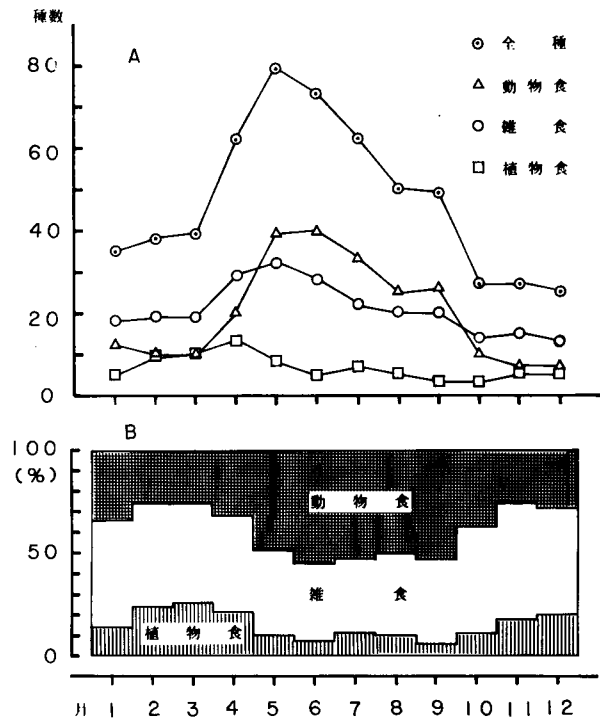


図-4 鳥類の食性により分類した季節変化

に、夏鳥が主体を占める夏期は動物食の種が多い。したがって5～7月までは動物食の種が多い。この種構成はワシタカ科やホトトギス科、ヒタキ科である。冬季の鳥類は雑食性の鳥類が50%を越え、夏期とは対象的であった。フクロウは森林とのつながりをもっていることはよく知られているが、とくに標茶区においてはカラマツを食害するエゾヤチネズミの天敵として重要な役割をはたしている。著者は林内のフクロウのねぐらで採集した不消化物のペリットを調べたところほとんどエゾヤチネズミ<sup>7)</sup>であった。

鳥類が繁殖できる条件として、その森林がバランスのとれた林相であることは言うまでもないが、フクロウやクマゲラが採餌木や営巣木及びねぐらとして利用できる木のうろがあることや、クマタカなどの大型猛きん類の大型巣が造巣できる暴れ木や立枯木が点在していることも必要な条件のひとつである。斎藤<sup>12)</sup>は、「立枯れ木の除去と鳥の反応」の抄訳のなかで、立枯れ木を除去した場所ではつがい数が51%も減少したが、残した場所では38%も増大したことをのべ、さらに立枯れ木および低質木、被害木を少なくとも7本/haは残したいものであるとのべている。林業的には価値の低い暴れ木やうろのある低質立木や立枯木でもフクロウやクマゲラにとっては、なくてはならない資源であり、また繁殖の場である。

食物連鎖の頂点にあるクマタカ、オオタカ、ハイタカなどの猛きん類が生息繁殖できる標茶区の森林は重要な意味をもつ。広葉樹、針葉樹の両森林性の鳥類、その森林をとりまく牧草地や若い人工林などのオープンランドがオオジシギやノビタキ、ヒバリなどの草原性の鳥類の生息地となる。また隣接する釧路川や多和川とその周辺は、ガンカモ類およびシギ、チドリなどの旅鳥の格好の休息地であり、またその河川敷は草原性のノビタキ、シマアオジの繁殖地として適した環境とみなされる。

このように森林構成が多様な現在の環境は鳥類相が比較的豊かな森林であるが、標茶区全林の25%におよぶカラマツやトドマツ、エゾマツなどの人工林が成木林として増大するのに伴い当然のことながら鳥類相も変化するであろう。針葉樹林性のヒガラ、キクイタダキが増し、コガラやヤマガラへの侵入が考えられるだろう。なお、これ以上針葉樹の造林地が増加すれば逆にクマタカやクマゲラ、キビタキ、ハリオアマツバメなどの広葉樹林性の鳥類の減少が予測される。森林と鳥類は微妙なバランスで成り立っており、鳥類に対して森林施業方法は鳥類の生活に重大な影響を与えるので鳥類の生態をも考慮した取り扱いが望ましい。

## 引用文献

- 1) 二村一男：北海道演習林の鳥類相。京大演集報。17。1～13, 1987
- 2) 大島誠一・北尾邦伸・竹内典之・和田茂彦：標茶区の天然林とその年令構造。京大演報。25。35～42, 1982
- 3) 岡本省吾：京都大学農学部北海道演習林植物目録。京大演報。25。35～80, 1956
- 4) 竹内典之・大窪勝・古本浩望・大牧治夫：標茶の気象。京大演集報。25。35～42, 1982
- 5) 二村一男：釧路川中流域のチドリについて。釧路市立博物館々報。286。93～94, 1984
- 6) 飯島一雄・川口善正・菊地浩・諏訪良光・豊原熙司・二村一男・涌坂周一：標茶町の天然記念物。9～10, 1984
- 7) 二村一男：京都大学北海道演習林におけるフクロウ、クマゲラならびにアメモスの摂食物について。釧路市立博物館々報。287。101～104, 1984
- 8) 三浦二郎・高田勝・黒沢信道：根室地方の野鳥。根室自然教育研究会会誌別冊。1981
- 9) 山田良造：旭川周辺の野鳥。野鳥だより—北海道—33。3～6, 1978
- 10) 金山哲夫・小山政弘：千歳・恵庭地方の鳥類。野鳥だより—北海道—32。2～5, 1978

- 11) 清棲幸保：野鳥の事典．東京堂出版．東京：pp413, 1966
- 12) 齋藤新一郎：〈抄訳〉立枯れ木の除去と鳥の反応．野鳥だより—北海道—37. 6, 1979